



石山寺縁起絵巻

滋賀県立近代美術館
学芸員 岩田由美子

1. はじめに

近江の寺社には、かなり古い時代から貴族や庶民の信仰を得て、遠く京の都から人々が参詣に訪れた古刹も少なくありません。

石山寺も、本尊如意輪観音の靈験をもって聞こえた觀音靈場で、都からは関を越え、湖水をながめつつ、寺の名ともなっている岩盤の景勝地に至るという、貴族の物語にうつつけの地の利があり、王朝貴族たちの尊崇を集めました。

石山寺縁起絵巻は、この石山寺の草創と靈験のあらたかさを説く、七巻から成る絵巻物です。話の数は三十三ありますが、これは觀音菩薩が衆生を救うために三十三の姿に変えて現れるという、『法華經』普門品の所説のその数になぞらえた数字です。

ところが、この七巻それぞれの絵と詞書に関して、これらは皆同時期に成立したものではなく、かなり複雑な、こみ入った制作事情

が考えられています。いったいこの絵巻は、どういった人が何を目的に制作しようとしたのでしょうか。この辺のことから話を始めてみましょう。

2. 絵巻発願

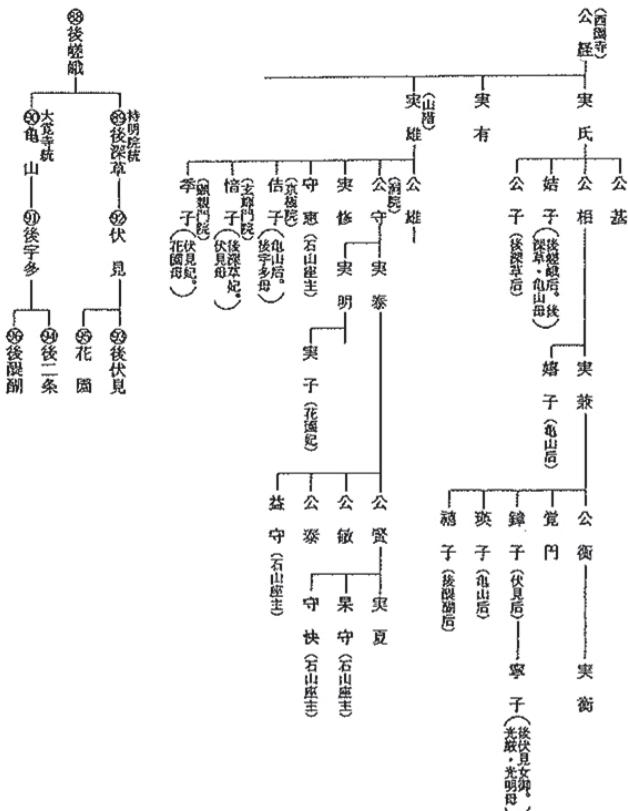
絵詞はその三十三段の話の構成を、寺の草創からほぼ年代を追って編述し、その最終段では後醍醐天皇の即位と後宇多院政の復活を記しています。また、第一巻巻頭の序文末尾には「ひとり樂浪大津宮に靈験無双の伽藍あることを記するのみならず、聖化正中の暦、王道恢弘し、仏家紹隆せることをしらしめむとなり」とあります。この正中年間（1324～26）に王道、つまり天皇の行う政治の道が広まり、というのは先の後醍醐帝即位と後宇多院政復活のことにほかなりません。さらに絵巻の六・七巻ではほかに洞院家を中心とする石山寺信仰とその靈験が語られます。ここで掲げた系図を参照して下さい。洞院家といふ

のは、西園寺家の公経の子実雄を家祖とする一門です。実雄の三人の女はそれぞれ後宇多・伏見・花園天皇の生母となっており、実雄の権勢は嫡家西園寺家をしのぐほど大きくなっています。実雄より八代の嫡宗はいずれも大臣となっています。そして、この洞院家は石山寺とは密接な関わりがあり、守恵・益守・梶守・守快の四人の石山座主を輩出している事実が明らかです。



第二巻 大津の浦を行く源順の一一行

(石山寺 所蔵)



つまり、後嵯峨天皇以降、皇統は持明院統と大覚寺統に分かれて両統が迭立し、加えて高位の貴族たちは競って息女を后妃として皇子生誕を望み、外戚となって家門繁栄することを願うという、貴族社会の特殊事情がこの絵巻には反映しています。石山寺縁起絵巻制作の背景には、洞院家繁栄の深い祈願が籠められていると考えられるのです。

そして、先程の第一巻序文にみたように、絵巻の制作が企てられ、おそらく絵詞が撰述されたのもこの時とみられる、正中年間という時期を慮ると、洞院公賢、その異母弟にあたる石山座主益守が、石山寺縁起絵巻の制作を企てた人物として注目されています。

3. 各巻制作の過程

しかし、この当初の計画通りに現在の石山寺縁起絵巻全七巻が制作されたわけではありません。最初に述べたように、これらは複雑な過程をへて制作されていったことがわかります。天皇親政を実現した後醍醐天皇は正中の変によって鎌倉幕府討滅に失敗し、その後の緊迫した政治情勢が当絵巻の成立にも何ら

かの影を落としていることが推測されます。

①第一・二・三巻の制作

現存の第一・二・三巻は、その詞書が石山座主果守の筆になることが、これまでの研究によりほぼ認められています。至徳四年(1387)に没したと推定される果守は益守の甥。絵巻制作が企てられ、詞書の撰述がなされたとみられる正中年間からは、ほぼ一世代のちに至って実際の詞書に筆が染められたことになります。

では、この一・二・三巻の絵の方はどうでしょうか。「春日權現験記絵巻」の画家として著名な宮廷絵師、高階隆兼をその筆者とする所伝があります。その真偽を立証するのはなかなか難しいところですが、隆兼の活躍期は正中年間でも晩年期にあたると思われ、この絵巻の絵はやはりその頃に隆兼周辺で制作された可能性が高いのです。つまり、第一・二・三巻の絵の方は絵巻の制作が企てられたのと、さほど時を経ずして描かれ、一方詞の方は約半世紀ほど経過してから果守によって執筆されたことになります。このことは、絵詞の料紙と絵の料紙（料紙とは絵や詞がかかれる一枚の紙片のこと、絵巻物の場合順次これを横につないで巻物の構成をとってゆくわけです）の寸法や紙質の相違からも裏付けられます。

②第五巻の制作

第五巻はこれまで、第一・二・三巻と同時期になり、しかも絵の方は同じ画家、あるいは同一流派の画家の手になるものという意見もありました。しかし子細に描写を見てゆくと、どうやら作風の相違を認めざるをえないようです。たとえば、人物の顔の描写も第五巻では、一・二・三巻にはない荒々しい容貌をなまなましく示すものになっていますし、樹木の表現も松が異様にたわんだ形で描かれていたり、山塊のうねるような表現など、一・二・三巻にはみられないものです。

このような相違は、単に画家の個性の相違

というよりも、時代を支配したその特性のひとつがあらわれとみるべきで、さらにもう少しになると、もっととっぴなゆがんだ姿に物の形を把握してゆくことが盛んに行われたりするようになります。ですから、第五巻の絵は第一・二・三巻の画趣をとどめている部分もあるのですが、描かれたのはやはり半世紀ほど隔てて後のもの、とみるのが妥当なようです。

一方、第五巻の詞ですが、ながく冷泉為重の筆になると伝えられ、ほかの為重自筆のものとの比較からも、ほぼ為重筆としてまちがいないと考えられます。冷泉為重(1324~85)は権中納言、従二位まで昇りましたが、至徳二年二月に夜討ちにあって殺害され、六十二歳で没しました。第一・二・三巻の詞書筆者果守とほぼ同時代の人物ということになります。第五巻に関しては絵も詞も第一・二・三巻の詞とほぼ同時期、つまり第一・二・三巻の絵画からは半世紀ほど経って後に制作されたものとみるべきでしょう。

③第四巻の制作

現存の第四巻の制作次第は三条西実隆(1455~1537)の日記『実隆公記』によって知ることができます。四巻の詞書が実隆その人の筆になることは書風からもほぼ疑問の余地はありません。『実隆公記』明応六年(1497)十月十一日条から、この日実隆が絵詞の書写を終えたことが明らかです。

一方、『実隆公記』には絵の方の筆者についての特定名は出てこないのですが、同じ明応六年の四月七日条には「(仁和寺の)真光院より石山寺絵一巻を送ってきた。詞書を執筆せよとのことで、先ずこれを預かり置く」とあります。肖像画の制作などで仁和寺真光院との関係が想定されるのは、土佐光信です。この第四巻は作風からも光信の筆に帰すものとして認めることができます。

『実隆公記』のこれ以前の文明八年(1476)二月三日条や、他の記録からも、明応六年に

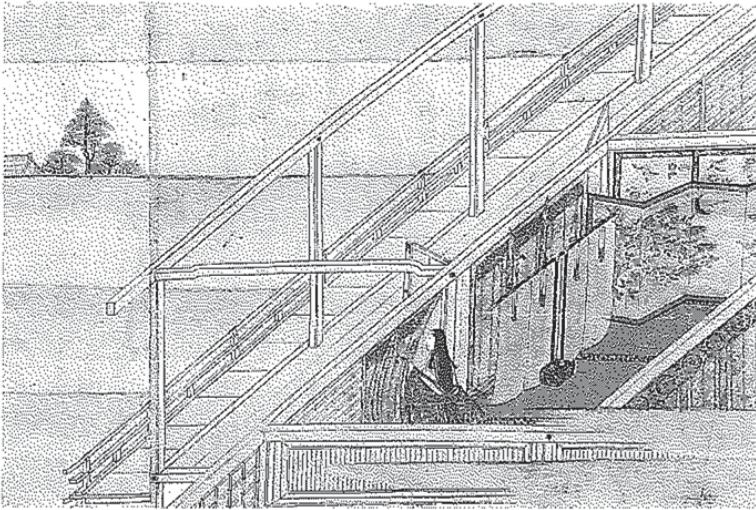
実隆が絵詞の執筆に関与するまで、石山寺縁起絵巻は全四巻であったことがわかります。一方、実隆執筆以降の十六世紀に入ると、この絵巻は全五巻として記録にみえます。つまり、石山寺の絵巻は明応六年までは一・二・三巻と五巻が伝わっており、その欠落を補うためにこの年第四巻が絵・絵詞ともに新しく制作されたのでした。

④第六・七巻の制作

さらに現存の六・七巻は、絵の方は谷文晁(1763~1840)によって描かれ、文化二年(1805)に完成したものです。谷文晁に指揮して描かせたのは松平定信(1758~1829)。『集古十種』や『古画類聚』を編纂し、古器古書画の資料採訪に尽くした定信が、石山寺での什宝拝見・石山寺縁起絵巻模写の返礼に、六・七巻の絵を補い制作することを引受けたといいます。ときの石山寺尊賢僧正は、飛鳥井雅章筆と伝わる六・七巻の詞書をたくし、定信は文晁には「一木一草たり共文晁が私意を禁じて」入念な制作にあたらせたのでした。

尊賢僧正が定信に送った飛鳥井雅章筆の詞書というのは、文化二年より百五十年遡った明暦元年(1655)頃、飛鳥井雅章(1611~79)によって書かれたものでした。明暦期は石山寺にとってひとつの整備期であったようで、多数の聖教類も整理され、また「新縁起絵」が制作されています。これはここで述べている「石山寺縁起絵巻」第一~五巻の模写本で、第一巻は詞書水無瀬兼俊・絵狩野安信、第二~五巻は詞書飛鳥井雅章・絵土佐光起という筆者名が、箱蓋裏に貼付けられています。ですから六・七巻に関しても雅章が詞書を執筆してあったのですが、絵の方は典拠とするものがなくそのままになっていたのを、百五十年たって文晁が新たに補作したということなのでしょう。

このように、現存の石山寺縁起絵巻全七巻



第四卷 湖水に映った月影を望む紫式部 (石山寺 所蔵)

は、五百年近い歳月をかけて成立したものです。全巻大和絵の筆法に負いながらも、各巻それぞれの時代の個性が随所に散見されます。南北朝の政変以降、目まぐるしく移りゆく歴史の流れを見守りながら、ようやく十九世紀の初頭に至って全巻ととのい、この絵巻はお寺の中で安らかな時を迎えたのかもしれません。

4. まとめに変えて

さて、紙面の都合もあり、あまり絵巻の内容に触れることができなかつたので、絵巻の中味をかいま見ておきましょう。

まず第一巻では良弁が比良明神の託宣を受け石山の地に草庵を建てるところから始まります。そして聖武天皇の御願により石山寺を建立することになり、建立後の常樂会の盛儀の様子、最後の段では宇多法皇の石山寺信仰のことが、六歌仙の一大伴黒主の詠歌の話にからめて語られます。濃彩の穏やかな描法で近江の風景が叙情的に表され、当時の大工作業や法会の様子も貴重な資料ですし、五尺もある宝鐸（銅鐸か）を掘り当てたところも描かれており、当絵巻のハイライトシーンのひとつといえましょう。

第二巻では『蜻蛉日記』の作者として著名な道綱の母や源順らに関する石山観音の靈験が語られ、源順の場面の絵画は特に大津の馬借を描いており注目されています。

第三巻では東三条院（藤原道長の姉で円融天皇の女御）の二度にわたる石山参詣が描かれ、これに続く『更級日記』の作者として知られる菅原孝標の女の石山参詣の場面は、雪景色の逢坂の関から石山寺近辺を情趣深く美しい画面に仕上げています。

第四巻には紫式部が石山寺で『源氏物語』の想を練ったという名高い伝承を描き、「源氏の間」から湖水の月影を望む式部の姿が表されています。この巻ではさらに式部と同時代の人である藤原道長の石山寺帰依や、石山寺座主深覚大僧正が修法により後一条天皇と敦良親王（後の後朱雀天皇）の病を平癒させたこと、次いで承暦二年（1078）に寺が炎上した際、本尊が火中より突び出し無事であった奇瑞ほかが描かれます。

第五巻は時代がさらに下がって院政期の逸話から成ります。おそらく実際に絵画が描かれた十四世紀後半の貴族生活の情景が彷彿とされる場面や、宇治川での漁労の様子など興味深い描写が続きます。

次いで第六巻は鎌倉期の石山寺の靈験利生が語られ、その巻末は先述の山階実雄が入内した娘たちに皇子の誕生を祈願した一段となります。そして第七巻は亀山法皇・後宇多上皇が同列に石山参詣した段で締めくくられる次第ですが、その詞書中にはのちの後醍醐帝即位と後宇多院政復活の一条が書き留められている先述の事実に注視せざるをえません。

石山寺縁起絵巻はみてきたような複雑な制作過程を経たものであるからこそ、私たちの祖先の暮らしや文化を知る、この上ない豊庫となっていると言えましょう。

滋賀文化財教室シリーズ No.157号

発行年月日 1996年2月1日
編集・発行 財団法人 滋賀県文化財保護協会
〒520-21 大津市瀬田南大萱町1732-2
TEL(0775)48-9780 FAX(0775)43-1525